し，相当する色の付箋に記入して黒板に貼る作業を行いました。色の選択には判断力が要求されますが、私が児童だったら間違いなく、体験した内容など関係なく、自分が気に入った色の付箋を選ぶことでしょう。

４時限目は、図書室や体育館等、学校施設の見学を行いました。研修を一通り終えた後、副校長先生に感想を聞かれ、「児童達の邪心のない態度に接して清々しい気分です」とそのままの気持ちを伝えました。今回の研修でお世話になりました先生方に心よりお礼申し上げます。

社会文化教育講座　森元　拓

新任研修の一環で、附属中学校の授業に一日参加しました。本研修で印象的だったのが、30年前に私が中学生として体験した授業とは形式的にも内容的にも大きく異なっていたことです。

形式面では、授業の進め方が全く違う印象を受けました。私が中学生の頃は、教師から一方通行の授業が基本で、教師が許可した時以外に生徒の発言は認められていませんでした。それに比べ、附属中学校での授業は、生徒が比較的自由に発言をし、それをもとに授業が進行しているように感じました。つまり、教師と生徒との間で会話のキャッチボールがくりひろげられながら、授業が進行しているのです。ときおり生徒の逸脱する発言もありますが、教師は、それを否定・無視することなく上手に受け止め、授業が進められていました。これは、教師が生徒の発言を上手に受け止めていると同時に、教師自身も授業を盛り上げて、生徒の学習意欲を高めているからだと感じました。私の中学時代では、教師が怖い存在であり、授業が厳粛なものであったことと比べると、隔世の感を受けました。

また、内容面でも、かつて私が中学生として受けた授業とは異なっている印象を受けました。かつては、知識の伝授に重点が置かれていたと記憶していますが、今の授業は、単なる知識の伝授に留まらず、生徒自らが考えるような工夫が随所にみられました。たとえば、「地理」の授業では国際的な貧困問題を肌で感じさせるために「貿易ゲーム」を行なっていたり、「公民」の授業では「コンビニの経営者になったつもりで、立地条件について考えてみよう」など、一工夫も二工夫もある授業を体験することができました。

もちろん、私の中学生時代と、今の授業を単純に比較することはできません。私が中学生だった頃は、校内暴力の嵐が吹き荒れ、第二次ベビーブームの時代で教室に生徒が詰め込まれていました。このため、ある程度、管理教育的な要素を導入せざるをえなかったのだと思います。しかし、それを前提にしても、今回の研修で私が参加した授業は、昔のものとは別種のものであると感じました。

このように、中学校の授業に参加することのできた今回の研修は、色々と考えさせられ、私にとって大変意義深いものでありました。最後に、忙しい中、対応頂いた附属中学の先生方とこのような機会を与えて下さったFD委員の先生方に心からの謝意を表し、本報告を終わることにしたいと思います。

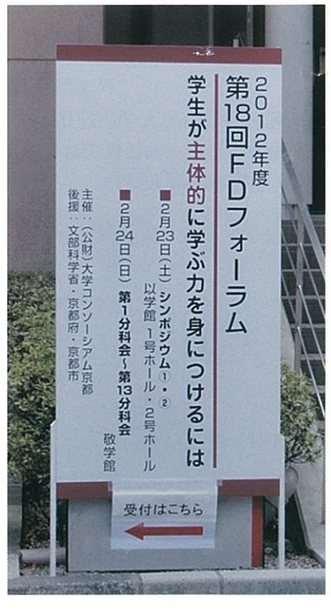
「第18回ＦＤフォーラム」参加報告

FD委員会　副委員長　酒匂　淳

2013年2月23・24日の2日間、立命館大学衣笠キャンパスで行われた「第18回FDフォーラム」に参加してきました。統一テーマ「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」のもと、1日目は2つのシンポジウムがおこなわれ、私は「学生とともにすすめるFDに出席しました。耳野健二教授（京都産業大）のコーディネートにより、木野　茂（立命館大教授）、梅村　修（追手門学院大教育研究所　所長）、村山孝道（京都文教大教務課係長）、山内尚子（京都産業大学長室）の諸氏、及び各大学の学生FDスタッフにより様々な活動報告が寸劇を交えてありました。学生FDとは「学生の視点からの学生による取り組みであり、教員・職員との三位一体で進めることが理想である（木野氏）との説明に集約されるようです。

2日目は13の分科会のうち、第3分科会「学生による授業アンケートの現状と課題とそして発展へ」に参加。井下　理（慶応義塾大教授）、功刀由記子（愛知大教授）、関内　隆（東北大教授）、田中　岳（九州大准教授）、西川紘治（中部大教育研究センター次長）の諸氏による報告、及び議論がありました。

FDの開始から20年を経た慶大の井下氏から「欧米がやっているからやるという形ばかりの取組みから、そろそろ我が国の独自のものを模索してはどうか」との提言があり、慶大SFCの授業評価の基本コンセプトの変革「モニターからコミュニケーションへ」、また新システム「学生・教員・職員間の情報流通システムへの脱皮」の紹介があり、1日目の学生FDとともに学生・教員・職員のコミュニケーションの重要性を改めて考えさせられました。



Faculty Development INVITATION
山梨大学教育人間科学部
第30号
March.30.2013

2012年度 教育人間科学部ＦＤフォーラム

「大学の授業を考える ―学生の視点から―」
日時／2013年1月15日(火)　16:30～17:55
場所／Y号館2階会議室

2012年度も教育人間科学部・教育学研究科合同のFDフォーラムを開催いたしました。

はじめに司会の古家委員から、FD フォーラムは、教員全体として授業の改善の視点への示唆を得たいがためであるとの開催趣旨の説明がなされました。

ついで、大西　FD委員長から、教える側からは気付かない視点、教わる側からこうして欲しいという意見は大学として貴重であること、小中学校では研究授業はあるが、大学にはないため教員同士の授業に対する意見交換や学生の意見がなかなか反映されにくい状況であること、とはいっても、この様なフォーラムをどうやったら活発にできるかも手探りの状況である、等の指摘があり、その端緒となればとの期待が述べられました。さらに、古家委員から、先頃、教員が作成した「授業工夫集」の内容の分析がなされ、このあと、討議に入りました。

以下その内容をまとめました。

【日頃受けている講義の問題点、改善必要点】

○大学院では実践に即した授業が多く、学生同士の意見交換もされ深い理解と多様な考え方を学べた。学部では、そこで受ける授業と自分が実際に行う附属校園での授業実習が結びつかないことがあった。

○模擬授業や収録したビデオの利用を充実させると良い。

○ルーブリック(rubric)が不明確な授業が多い。

○技能の修得に当たって、理論と演習、応用というステップを踏み、その都度、体系的理解をするのか、数式を使って計算するのかを明確化させて欲しい。

○学校の先生になりたいと思ってきているのに、不要と思われることを学ばねばならないと感じることがあるので、専門以外のことを学ぶ意味など、教養の重要性を説くことが大事だと思う。

○教職大学院での少人数授業は重要である。

○一方、コミットメントペーパーを利用した大規模の授業では、学生が授業をしっかり聞くことができるし、疑問もすぐ聞けるし、自分の質問が次の授業で使ってもらえると自信にもなり次の授業への意欲がわく。自分たちの声が授業に生きているという実感が大切で、それが、大人数の講義では重要である。

○一番改善して欲しかったのは、スライドの文字数が多すぎてメモできない講義。めくるのも早くメモするだけで精一杯で頭に入らない。ただ付いていくだけの講義になった。紙の資料を配付して欲しかった。

○パワポを使うときには枚数と情報量に気をつけて作成して欲しい。教科書の記述との対応も明示して欲しい。講義のあと Web 上に upload してはどうか。穴埋め式にしてあるスライドもあって、これはよかった。

○学ぶ学生の側を配慮して丁寧に具体例を出してもらえる場合はよいが、教員自身の研究の世界を伝えたい熱意と受講者側の学習意欲とが噛み合わないことがあった。

○他の課程の授業を受けに行く必要があるときは、こちらの予備知識に不安があるし、知人もいないので勇気が必要。そのときに適切なアドバイスをもらえたら有難い。
(教員から、課程を越えて結構活発にやっている授業もあるとのコメントあり)

○何で合格になったのか分からない授業がある。先生側から見ると一定の水準に達しているのかも知れないが、学生の側からも結果を納得できる様に目標を明確して欲しい。
(学部長から、講義の質の重要性が問われているので、シラバスの到達目標と評価、学生が自覚的になれるようにしていく必要があるとのコメントあり)

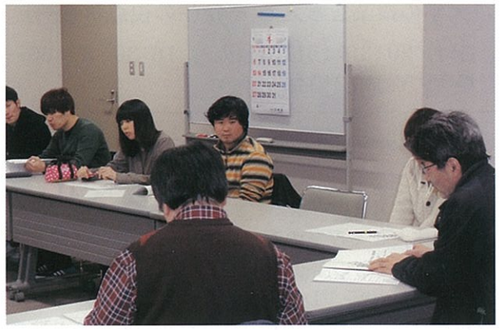
○授業人数の規模について、少なければ良いという

ものではなく、内容によるし、少ない人数でも評価が甘くならない厳格な授業を期待している。
○受講者が学ぶ動機を持ちつづけていないと教える側はつらいが、その対策。
○前回の授業での学生の理解した状況を十分把握して、次の授業を組めるとよい。その様な授業も存在する。
○大人数の講義で、出席をカードで取る時の不正行為に対応して欲しい。
(学部長から教員としてはそれを許さない断固とした態度が必要とのコメントあり)
○特に教職課程の授業では、教員側が学生に甘いことはしてほしくない。その人が教員になってから問題が起きない様に配慮して欲しい。
○毎年開講されている授業の内容は同じという教員も見受けられるが、変えた方がいい。
【評価について】
○中間試験の結果を良く知りたい。
○テストができてもノートの取り方に問題があれば単位が出ない授業があり、これは良いと思った。
○評価方法を選べる（筆記試験か発表か）授業があり、これはよかった。
【シラバスについて】
○選択科目を選ぶときはシラバスと先輩の声を合せて判断した。
○授業と授業の関連が体系的に並べてあると良い。工学部の方はそれがはっきりしている。

最後に、この様なフォーラムの設定時間に関して聞いてみましたら、授業のある時間帯に設定した方がその時間が受けるべき講義の隙間の時間になっている学生が参加してくれるのではないかとの意見がありました。

次回には、さらに活発な討議がなされて、授業のさらなる改善に資することを期待いたします。

FD委員会委員長　大西　良博



附属学校園における新任教員の初任者研修

新任教員の初任者研修が附属学校園で行われました。2012年度は5名の先生が参加され、それぞれ大変有意義な研修となったとお聞きしております。参加された先生方の報告を紹介させていただきます。

芸術文化教育学講座　大内　邦靖

初任者研修の一環として、6月25日附属中学校にお邪魔いたしました。学校生活のありのままの姿を見せていただき、「現場に求められる力とは何か」を実感し、私の大学における人材育成について再考する有意義な機会となりました。

子供たちの学校生活を観察する中で、大変驚いたのは、彼らが皆、主体的に授業や課題に取り組んでいる事でした。誰一人怠ける事なく、目の前の課題に興味を持ち、自らの意志で積極的に取り組む姿勢には、自らの中学生活とのあまりのギャップに衝撃を受けました。また、一部障害を持った生徒に対しても、同じクラスの生徒が理解し、サポートし、秩序を保とうと主体的に行動している姿も見る事ができました。これらは一朝一夕には実現できるものではないと感じます。先生方の高い志と、目標に向けてのご努力の積み重ねを実感しました。

研修終了後、吹奏楽部の活動を見せていただきながら、私の専門でもあるトロンボーンの指導をさせていただきました。大変意欲的な子供たちは、ちょっとしたアドヴァイスで、自身や友人の音がみるみる変わってくると、目を輝かせ、上達へのむき出しの意欲を隠そうとしません。ひとつ残念だったのは、彼らの楽器の環境が決して良いものではなかった事です。経年劣化は兎も角、サイズや仕様などの点において、専門家として少々問題を感じました。金銭的なハードルなど、簡単ではない課題を含んでいると思いますが、私の立場からは「改善を望む」と申し添えておきます。

附属中での1日は、私にとって大変収穫の多い体験でした。この研修のためにご尽力くださった先生方に心よりお礼申し上げます。

幼小発達教育講座　鴨川　明子

2012年の秋に、山梨大学附属幼稚園で初任者研修の機会をいただきました。1歳の息子を子育てしている最中のため、同じ年頃の子どもたちの様子を拝見したいという素朴な気持ちから幼稚園に伺いました。比較教育学という専門ゆえ、アジアの学校にはフィールドワークに行くことがあるのですが、日本の幼稚園にうかがうのは初めてのことでした。そのため、最初の内は教室のはじっこに立ってじっとしていました。そんな私の様子を察してか、先生方が優しく声をかけてくださり、年少クラスの園児やお母さん方と陶芸体験を、年中クラスの園児とはお店屋さんごっこをしながら楽しく過ごしました。先生方のご配慮のおかげで、研修中に積極的に園児やお母さん方と関わることができました。このような貴重な体験をする機会をくださり、園長の藤本先生、副園長の武川先生はじめ関係の先生方に御礼申し上げます。

芸術文化教育講座　武末　裕子

「今日は風を食べてきたから、飛んで来たの。」登園し開口一番の園児の言葉、その感覚の豊かさに驚きました。私は初任者研修の一環として、7月に附属幼稚園で1日体験をさせていただきました。

彫刻的な視点から触覚をたよりとした美術教育の実践研究と遊具（彫刻）制作を行い、過去に幼稚園の遊具制作・設置プロジェクトに参加した経験から、この度は幼稚園見学を希望いたしました。

短い時間でしたが、年少組の友達と生活を楽しむ元気な姿、年中組の自分なりの楽しみ方を見つけて遊ぶ姿、年長組の自覚に溢れ、課題意識を持って生活を楽しむ姿が見られて、園が研究課題としている「自らかかわり創り出す園生活」へ一つひとつがつながっているように感じました。

また、当日はお誕生日会が催され、子どもの成長を心から願う保護者と園の様子、その愛情を受け、喜びを自分なりに表現する園児の様子がとても印象的でした。

自由に遊ぶ時間にも、個々の関心に合わせた展開が可能な空間づくりがなされており、特に中庭の水田やビオトープで水草の成長やトンボのふ化を息を潜めて観察し真剣に考える園児の姿からは先生方が園児の自発的な展開に着目し時間をかけて空間づくり進められた様子がうかがえ、空間の心地良さが園児を伸びやかに育てているように感じました。

今回の一日体験を通して、附属学校の教育に対する理解が深まった事に加え、学生に対しても常に授業の先に現場があるという点を意識させ伝えていきたいと考える良い機会となりました。

最後に、このような機会を与えてくださったFD委員会の先生方と附属幼稚園先生方に心より感謝申し上げます。貴重な体験をありがとうございました。

科学教育講座　福地　龍郎

9月初めに山梨大学に赴任し、11月末に初任者研修を受けました。前任校では理学部に在籍していましたが、小学校教師を目指す学生の教育は初めてでしたので、研修先として附属小学校を選びました。研修の1時限目は4年生の理科実験を参観しました。この日は「水を沸騰させた時に出る泡は何かを学習する授業で、どうしたら泡の正体を突き止められるかを考えさせていました。児童達は出てきた泡を風船で捉えて調べるなど、ユニークな実験を考案していました。限られた時間内で事前予測や実験考案をさせる授業は、大変参考になりました。

2時限目は5年生の理科を参観しました。この日は「電磁石の性質」を学習する授業でした。電磁石のN極側とS極側を先生と児童が思いっきり引っ張る実験では、児童達がぶら下がっても離れない電磁石が電流コードを外した途端に呆気なく離れ、電磁石の性質を身をもって体験していました。理科の原点は遊び心にある事を再認識した授業でした。

3時限目は2年生の生活科を参観しました。この日は前週実施した「街の探検」で体験した事をまとめる授業でした。児童達は街で体験した内容を色別に分類